

氏 名 (本籍)	李 湊 珍 (韓 国)
学 位 の 種 類	博 士 (社 会 学)
学 位 記 番 号	博 甲 第 5604 号
学位授与年月日	平成 23 年 3 月 25 日
学位授与の要件	学位規則第 4 条第 1 項該当
審 査 研 究 科	人文社会科学研究科
学 位 論 文 題 目	現代日本における韓国人出稼ぎ労働者の社会学的研究 - <移動>実践の中での寿町とコミュニティ・ユニオン -
主 査	筑波大学教授 博士 (文学) 好 井 裕 明
副 査	筑波大学教授 博士 (人間科学) 土 井 隆 義
副 査	筑波大学准教授 樽 川 典 子
副 査	関西学院大学社会学部教授 博士 (社会学) 三 浦 耕吉郎

## 論 文 の 内 容 の 要 旨

本論文は、現代日本における外国人労働者の一部分である寿町の韓国人出稼ぎ労働者の諸実践を<移動>という経験からとらえ直すものである。実際の移動のみならず、移動の可能性や、帰国後も韓国人出稼ぎ労働者の暮らしに影響を与え続ける経験として、<移動>を定義したうえ、韓国人出稼ぎ労働者という対象に焦点を当て、分析を行っている。具体的なアプローチとして、1980年代後半から現在までの寿町の韓国人出稼ぎ労働者たちの生活世界がいかなるものであったのかを検討している。1980年代後半から1990年代前半にかけて、横浜の寿町に韓国人たちの大量流入がなぜ可能であったかを個々人の事情の他に彼らを取り巻く社会構造まで視野に入れ考察する。そして、自己完結的な生活世界を固守していた彼らはいかなる契機により、日本の労働組合に接続していくのかについて、多角的に検討する。このような作業を通じて、<移動>という経験が、彼らの人生をいかに規定しているのかを本論文全体で明らかにしている。<移動>契機として形成される日本と韓国という両国をまたぐ生活圏を生きるために、彼らは自分たちを取り巻く越境的社会空間をいかに形成・維持しているのか。その内実への探求のために本論文では以下のような作業を行った。

第一章では、寿町への韓国人出稼ぎ労働者の流入に関して考察した。寿町という空間を、トランスナショナルな社会構造と深い関わりを保持する主体の<移動>実践が繰り広げられる場所として定義し、<移動>実践の背景にある各自の戦略が露骨に表出される空間でもあることを明らかにした。そして、寿町の歴史的な背景を記述し、韓国人出稼ぎ労働者が寿町への流入および集住することの社会的意味を示した。具体的には、寿町への済州島及び他地域からの韓国人たちの移住経験について概観した。そこからは彼らを取り巻く社会的な状況の多岐にわたるリアリティが浮き彫りになると同時に、彼らが個々の選択において移住というものを遂行してきたことが示唆される。

次に第二章では、従来一枚岩に捉えられてきたエスニック・コミュニティをめぐる認識に対する疑問を投げかけた。外部の視線からは「助け合い」、「共同生活」に見えてしまう寿町の韓国人出稼ぎ労働者たちの生活を、彼らの労働と生活の内実を、当人たちの語りから再構成した。特に、就労構造、住居、落札契（タノモシ講）、パチンコなどに注目して検討した。具体的には、「韓国人親方」中心の就労構造を明らかにするこ

とによって、エスニック・コミュニティ内部には相互扶助的＝市場媒介的な関係が存在していることを指摘した。それと同時に、そういったコミュニティを維持させるにはコミュニティ内部の個々人の犠牲が伴うことも確認できた。住居の側面においては、韓国人出稼ぎ労働者と在日コリアンとの複雑な関係を提示した。そして、彼らの生活世界の一部を織り成す、落札契（ゲ）（タノモシ講）とパチンコについて考察を行った。構造的な制約のなかで、韓国人出稼ぎ労働者たちはいかにして自分たちの日常を生きているのか、それらの事例から示される。その結果、寿町のエスニック・コミュニティはユートピアでもなく、そこに住まう人びとは、それぞれの日々の生活を営むために妥協と克服、そして彼らなりの合理的判断に基づく生活戦略の遂行が明らかになった。

第三章では、日本の労働組合の現状を提示し、非正規職労働者の底辺にある外国人労働者の組織化に集中的に取り組んできたコミュニティ・ユニオンの一つである神奈川シティユニオンの1990年代前半における土台形成期に注目して分析を行った。当時、神奈川シティユニオンの組合員の多数を占めていた人たちは横浜の寿町からの韓国人労働者である。特に、1980年代後半から1990年代前半にかけて、寿町で独立／孤立した生活世界を固守していた韓国人出稼ぎ労働者たちはいかにして日本の労働組合である神奈川シティユニオンにつながるようになったのかを明らかにし、韓国人出稼ぎ労働者たちの労働組合への加入と離脱が何を意味しているのかを検討した。その作業のなかで、韓国人出稼ぎ労働者の構造的な制約のみならず、思想的制約に関する考察も行った。彼らの生を規定している韓国と日本の社会構造が、日本のコミュニティ・ユニオンに接続することによって一層可視化された。手順としては、神奈川シティユニオンの組織概要と変遷そして、ネットワークについて整理し、神奈川シティユニオンに韓国人出稼ぎ労働者が接続するモメントとそれにかかわる彼らの意味世界に重点をおいて分析した。その結果として、狭い簡易宿泊所に密集していたこと、および、同一のエスニシティを媒介にしていたことによる集団性と団結性の確保は神奈川シティユニオンの労働組合活動を可能にしたが、寄せ場の密集性は労働組合活動を妨げる要素にもなり、韓国人出稼ぎ労働者たちを分散させる影響力ももっていた。そういう逆説的な状況において、日本の韓国人出稼ぎ労働者の情報ネットワークを通じて、神奈川シティユニオンの活動は広がることが確認できた。

第四章では、一人の韓国人男性出稼ぎ労働者のライフストーリーに着目し、考察した。とりわけ、当人によるカレンダー記録を分析することによって、寿町と神奈川シティユニオンが個人レベルでいかにとらえられていたかが明らかになった。その作業を通じて、寿町を生きる韓国人出稼ぎ労働者の生活世界を可視化させた。

第五章では、＜移動＞実践によって、韓国人出稼ぎ労働者たちの親密な関係性にいかなる変化がもたらされているのかを考察した。＜移動＞をきっかけにほとんどの出稼ぎ労働者たちは親密な関係性の変容を経験するといっても、過言ではない。特に、長期間におよぼ異郷での生活は、そこが、すでに異郷ではなくなり、自分の日常の現実として関係性を結んでいくようになる。彼らは、意識的あれ、無意識的であれ、その関係性に巻き込まれていき、自分の親密圏の変容を余儀なくされる。そして、現実社会と、彼らが生きている意識および身体とのギャップが、より顕在化されるところが、実は、セクシュアリティや家族規範という親密な関係性の領域でもある。そのため、＜移動＞実践と親密な関係性との関係に注目して、男女二人のライフストーリーを分析した。

最後に第六章では、＜移動＞をめぐる様々なストーリーから、＜移動＞に託された思いと正当化の論理を整理した。それによって、韓国人出稼ぎ労働経験者の＜移動＞実践をめぐる様々な語りを聞くことは、埋もれて消えてしまいそうなく＜移動＞に関する生のストーリーを歴史として拾い上げることにつながると考えられる。＜移動＞という事象は一つのヒストリーとして描けるようなものではけっしてなく、多様で、無数のストーリーからしかとらえることができないのである。

以上が本論文の内容であるが、従来の移民・移住・移動に関わる事例研究においては、トランスナショナ

ルな移民・移住者・移動民がみせる行為のダイナミズムに焦点を当て、ポジティブな評価をする傾向が強い。しかし、本論文においては、国際移民が形成する越境的社会空間を把握するために取り扱った個々の労働者から聞き取った＜移動＞の経験からは、彼らに対するネガティブな印象まで与えかねない内容も含まれている。そのため、本調査研究には、日本の社会的弱者である彼らに負のイメージを加重させることにつながる危険性をも孕んでいる。とはいえ、本論文における＜移動＞実践のリアリティの把握のために、それはある意味やむをえない作業であった。一枚岩的にとらえられてきた楽観論的なエスニック・コミュニティに対する把握からは距離をおき、＜移動＞実践者たちの社会的ネットワークの内部に潜んでいる権力関係に注目して分析を行った。＜移動＞実践者への偏見や差別を拒否しながらも、越境的な社会空間における彼らの行為を、既存の社会的観念からの判断を留保して、彼らの＜移動＞実践を当人たちの語りから再構成している。

## 審 査 の 結 果 の 要 旨

本論文に通底している問題関心は、韓国人出稼ぎ労働者の諸実践を＜移動＞という経験からいかに解釈できるかということである。そのために、寿町という社会空間と神奈川シティユニオンという日本のコミュニティ・ユニオンとの関係性を、出稼ぎ労働者たちのライフストーリー、支援活動家などへのインタビュー、そして、コミュニティ・ユニオンでのフィールド調査、文献調査などを通じて、寿町の韓国人出稼ぎ労働者の＜移動＞という経験を明らかにした。調査の過程で、生活現場で具体的に喜び苦悩し生きている人々と著者がつくりあげた信頼関係は貴重なものであり、その信頼が構築されていたからこそネガティブな意味合いも含まれ得る個別詳細な生活実践を把握し批判的に検討できたといえよう。その知見を理論的にいかに反映させるかなどはまだ不十分であり、課題も残るが、本論文は韓国人出稼ぎ労働者の諸実践を、社会構造や個人の選択として限定して論じるのではなく、彼らの経験から論じあげていくことによって、新たな視角や論点から日本における外国人労働者問題を提起できており、価値は非常に高いと言える。

よって、著者は博士（社会学）の学位を受けるに十分な資格を有するものと認める。